様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０４３２

研究課題名（和文）接辞・態辞による、２語幹語彙素の語幹の選択に関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文）Theoretical and positivistic research on Affixes' and Voices' selections of stem morphemes for lexemes with two allomorphs

研究代表者
古賀　弘毅（Koga, Hiroki）

佐賀大学・全学教育機構・准教授

研究者番号：８０３３０２１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究で、九州西北部の方言の過去辞と否定辞が、語幹に二つの形態がある場合、どちらの形態を選択するかを説明する科学的な文法を作った（Koga 2012a）。後、本研究の喫緊の課題、仮定「下２段動詞の非過去形の語尾の /uru/ を非過去辞 /u/ と /ru/ の複合である」の証拠を佐賀西部方言の形態音韻論現象「下２段動詞の非過去形を一方とし、上一段動詞と４段動詞の非過去形を他方とし、前者で長音ではなく撥音で現れ、後者で撥音でもよいが長音が好まれることが現れる」、また、より簡単な佐賀武雄方言の現象を分析した。研究は音韻論の知見を必要とする形態音韻論の研究となった。

研究成果の概要（英文）：Koga 2012a proposes a grammar to explain which of the two allomorphs the affixes of the past tense and negation select. The urgent need to make convincing the assumption that the word-final /uru/ of the non-past forms of the vowel /e/-final verbs in western Saga dialect is a complex of the non-past morphemes /u/ and /ru/. Chainging the directions ofresearh, we stared a research on the morpho-phonological phenomenon in western Saga dialect that the /ru/-final non-past forms of vowel /e/-final verbs can be geminates but not a lengthened vowel whereas those of vowel /i/-final and consonant-final ones can be a lengthened vowel and are preferred to be a lengthened vowel. We analyzed the phenomenon of Takeo Saga dialect which is simpler than that of western Saga dialect.

研究分野：言語学

キーワード：代償延長　代償重子音　拍理論　語幹選択　接辞

１．研究開始当初の背景

日本語佐賀西部方言の動詞形態論の研究 Koga 2009; 2011 は、佐賀西部方言の非過去の動詞形のデータ収録とその分析を提案した。非過去を時制の虚辞と仮定して、「下 2 段動詞」と「不規則動詞」の現在形では、虚辞（**u**　あるいは **ru**）が重ねられ、***u-ru***（ハイフンは形態境界を表す）が非過去辞、時制虚辞であると分析した。

佐賀西部方言		標準語
表層形	基底形	
1)　to:/to?	tor-u	toru
2)　oki:/oki?	oki-ru	okiru
3)　tabu?	tab-**u-ru**	taberu
4)　su?	k-**u-ru**	kuru
5)　su?	s-**u-ru**	suru

また、時制虚辞の意味を提案した。**時制虚辞が重なるときのみ、後ろの *ru* に対応する部分が同方言では、重子音の前半部分かあるいは無声閉鎖音、あるいは、声帯の縮小が起こらなければならない**ことを発見した。この分析が正しいとしたら、「下二段段動詞」と「不規則動詞」には語幹が二つあることになり、その場合、接辞や態辞が動詞句[語幹]を補語として取る場合、どちらの語幹を取るかという問題が起こった。本研究はこの課題解決から始まった。

２．研究の目的

本研究は、九州西北部の方言において、**語彙素に二つの語幹がある場合に、動詞（句）を補語として取り、その主要辞の動詞形として語幹を求める過去辞、否定辞、態辞（使役辞、受け身辞）が、どちらの語幹を選択するか**を説明する科学的な文法を構築することも目的とする。

３．研究の方法

データとしては、佐賀西部方言の動詞形（日常よく使われる標準語の動詞に対応するもの）、非過去形、否定形を 266 個とそれを含む文のそれぞれを収録する。

現象を説明する理論を考え、それがうまくいくかどうかを構文解析器上に実装することで検証しながら、構築する。

４．研究成果

佐賀西部方言の 266 個の否定形とそれを含む文の音声データの収録を行った。URL 以下参照。

文の統語範疇の補語 - 主要辞関係でより深ければ深いほど（詳細には、図１中の右（→方向）に行けば行くほど、かつ、下（↓方向）に行けば行くほど）、語幹の長形が選ばれることを発見した（Koga 2012a）。

→
↓非過去辞
過去辞　　命令辞　否定辞　態辞

図１

この階層関係は、文の動詞と機能範疇の階層関係の地図（cartography、遠藤 2014: 24, 61）を反映している。この記述的一般化で不十分なのは、不規則形（軽動詞）の ***se-sas-u-ru*** が *s-as-u-ru* でもいいことである。

Koga 2014 は、佐賀西部方言における否定形を観察し、Koga 2012a の語幹選択の主張を確認した。多くの場合、例えば、標準語、*tabenai* を方言の語 *tabeN*のように、標準語の否定形の「*nai*」が同方言で「*N*」に対応する。しかし、不規則動詞、軽動詞では、*sinai* に対応する *siN* ではなく、***sen*** である。これは、Koga 2012a の予測通りである。

研究の過程で、語幹選択とは異なる以下の現象がこの方言で発見された。上一段動詞の否定形が、*nai* を *N* に替えた否定形より、*nai* を *raN* に替えた否定形が好まれる。

佐賀方言		標準語
否定形	基底形	
oki**raN**	oki-raN	*oki**ra**nai
?oki**N**	oki-N	okinai
mi**raN**	mi-raN	*mi**ra**nai
?mi**N**	mi-N	minai
yomaN	yom-aN	yomanai

Koga 2014 は、非過去形の場合に時制虚辞が重ねられ、*u-ru* が作られたように、何らかの理由で *iN* が避けられ、否定辞の長形(4 段動詞で使われるもの)を使い、母音連続（hiatus）を避け、子音で最も弱い *r* により調整され、*raN* が使われたとした。

その他では、申請者の一連の研究の核となる非過去形の形態音韻論の分析を進め、現在、音韻論の最適性理論を導入しているところであり、Koga 2016 は最適性理論の研究手法で佐賀西部方言より簡単な佐賀武雄方言の現象の McCarthy 2008 に従った記述的一般化（以下）を提示した。

With a non-initial sonorant-high vowel syllable avoided, the sonorant remains with the high vowel absent only if either the vowel or the sonorant plus the vowel is associated with the non-past tense and the POA of the sonorant is coronal. Furthermore, the geminate of the consonant following the sonorant-high vowel sequence compensatorily occurs in place of the liquid.　(Koga 2016)

日本語訳：語頭でない共鳴音-高母音の音節を避け、高母音か、あるいは、共鳴音-高母音かが非過去辞であり、かつ、共鳴音の調

音点が前方であれば、共鳴音が残り、高母音が存在しない。さらに、共鳴音-高母音の連なりに続く子音の重子音が流音の代わりに代償的に生起する。

Koga 2016 以前の関連する形態音韻論の研究（**を付けた発表）は、原始的段階のものであり後に修正されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）
・ Koga, Hiroki. 2016. A descriptive generalization of apocope of /u/ and /r/ and compensatory geminates of the non-past forms. *全学教育機構紀要*第 4 号、19-34.

・**Koga, Hiroki. 2015. The non-vocalizing alveolar tap /r/. *全学教育機構紀要*第 3 号、1-13.

・（言語学会の口頭発表と同一のもの、若干の修正有） Koga, Hiroki. 2014. Another allomorph of the negative affix readjusted with a juncture segment at the initial. *佐賀大学全学教育機構紀要*第 2 号, 73-82.

・Koga, Hiroki. (査読有) 2012a. Past Affix' Selection of Verbal Stems. *Proceedings of the 19th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar*, 232-250, CSLI

〔学会発表〕（計 6 件）
**Koga, Hiroki. 2015. Harmonic Serialism-OT for CV-apocope and compensatory lengthening in a mora-respecting language. 言語学談話会、10 月　札幌学院大学

**Koga, Hiroki. 2015. Compensatory geminates in Japanese dialects. Phonological Forum 2015、8 月、大阪大学豊中キャンパス

**Koga, Hiroki. 2014. 末尾子音の不生起に対する代償としての長母音化母音と重子音. 福岡言語学会、福岡大学

**Koga, Hiroki. 2013. The contraction of the unmarked tense morpheme duplicated due to prosodic minimality. 1st International Symposium, Morphology and its interfaces. September, Universite Lille 3 in Lille, France.

**Koga, Hiroki. 2013. The morphologically regressively assimilated consonants. International Conference of Phonetics and Phonology in January, 2013, 国立国語研究所、Tokyo.

Koga, Hiroki. 2012b. Negative forms with the thematically-adjusted affixal stem /raN/ *日本言語学会第 145 回*　九州大学にて開催

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
・業績のほとんどを以下の私の HP（以下の URL）で見られるようにしている。
http://theoreticallinglab.isc.saga-u.ac.jp/research_topics.html
音声データも聞ける。

・佐賀大学歴史文化センターのデータベース：佐賀西部方言の非過去形と否定形、それらを含む文が聞ける。
http://www.chiikigaku.saga-u.ac.jp/sound_db/saga-hogen.html

６．研究組織
(1)研究代表者　古賀　弘毅（KOGA, Hiroki）
（准教授）
佐賀大学　全学教育機構
研究者番号：８０３３０２１５

(2)研究分担者　堂薗　浩（DOZONO, Hiroshi）
（准教授）
佐賀大学工学系研究科
研究者番号：　００２１７６１３

(3)連携研究者　小野　浩司（ONO, Koji）
（教授）

佐賀大学教育学部
研究者番号：　８０１７７２６１